全校研究

全校研究 研究主題

「児童生徒一人一人が主体的に学び、学びを広げる姿を目指した国語の授業づくり」

（１年次／２年計画）

１　主題設定理由

（１）前年度の研究課題から

前年度は「『自ら考え行動する力』を育む授業づくり」の研究主題で、学級の生活単元学習を中心に授業づくりに取り組んだ。成果として、繰り返し挑戦できる発展的な単元計画の作成、ＩＣＴを効果的に活用した授業づくりなどが挙げられた。一方、課題として、めあての言葉の意味が分からなかったり、自分で学習活動のポイントを押さえられなかったり、振り返りの際に自分の言葉で表現できなかったりするなど、特に思考・判断・表現に関わる、児童生徒一人一人の実態に応じた主体的な学びが不十分であったことが挙げられた。

これらの要因として、「言葉から内容や様子をイメージする」「必要な情報を取り出す」「教師の説明や資料から新たな知識を得る」（聞く・読む）、「自分の考えをまとめたり、伝えたりする」（話す・書く）等、国語科における育成を目指す資質・能力や言語能力の不足が挙げられる。本研究では、これらの力は学習の基盤となる資質・能力であり、教科等横断的な視点に立って育成し、学びへの興味・関心や思考・判断・表現等の主体的に学ぶ力につなげたいと考えた。

（２）学習指導要領から

① 主体的な学びについて

学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこととしており、「主体的な学び」の視点を「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」としている。

② 学びを広げるために

特別支援学校小学校学習指導要領の知的障害教育の各教科の第２「指導計画の作成と各教科全体にわたる内容の取扱い」では、次の記載がされている。（中学部・高等部はこれに準じる）

> ・個々の児童の実態に即して、教科別の指導を行うほか、必要に応じて各教科、道徳科、外国語活動、特別活動及び自立活動を合わせて指導を行うなど、効果的な指導方法を工夫するものとする。その際、各教科等において育成を目指す資質・能力を明らかにし、各教科等の内容間の関連を十分に図るよう配慮するものとする。

本研究においても、国語科における児童生徒一人一人の実態に応じた資質・能力を明確にし、各教科等の内容を関連付けて指導計画を作成して指導を実践し、他の学習や生活場面において学びを活用する等、学びを広げる姿を育みたい。

③ 国語科の指導の重要性から

さらに学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力である言語能力の育成を

重視している。特に「言葉を直接の学習対象とする国語科の果たす役割は大きく」、「言語能力の育成が図られるよう、国語科を要としつつ、教育課程全体を見渡した組織的・計画的な取り組みが求められる」としている。これらは国語を重視する本研究の方向性と合致している。

以上より、本研究主題を設定した。

2　主題の捉え

（１）一人一人が主体的に学ぶ姿

① 学びのめあてや意義をもつ

児童生徒一人一人の適切な目標が設定された指導計画のもと、単元や本時のめあて、活動内容が分かり、学ぶことへの興味・関心や学習上、生活上の必要感をもつ。

② 自ら思考・判断・表現する

児童生徒一人一人が、既習の知識・技能を活用しながら、質の高い学習活動に取り組み、自ら思考・判断・表現して、生活に生かせる知識・技能を習得したり、課題を解決したりする。

③ 学びを振り返る

本時のめあてに沿って自分の活動を振り返り、成果や課題をもち、次時につなげようとする。

（２）学びを広げる姿

・発達段階・生活年齢や国語科の系統性を考慮し、もう少しで（支援があれば）できる新しい学びを習得する。

・既習内容や自分の経験など、学んだことを他の学習や生活場面でも活用する。

3　研究仮説

国語の授業づくりにおいて次の手立てを講じることで、「児童生徒一人一人が主体的に学び、学びを広げる姿」を育むことができるであろう。

柱１　国語科の段階、目標等の設定

柱２　教科等横断的な視点に基づく指導計画の作成

柱３　重点事項（「具体的に考える場面の設定と工夫」「めあてとまとめの工夫」）に基づく、国語の授業づくり・授業実践

柱４　「各教科等を合わせた指導」等における学んだことの活用

4　研究計画

次の表１のように研究を進める。

表１　研究計画

期　日	会　名	内　容		
		小学部	中学部	高等部
4月17日		●全校授業研、学部授業研の授業者、日時の選定		
4月25日	全校研究会①	●令和５年度の全校研究 ➢ 全校研究の概要、研究計画		

		➢ 指導内容確認表及び学習指導要領解説または及び同解説（各教科等編）を活用した国語科の学習状況の把握の方法 ➢ 4/27 の学部研①の内容を実施		
4月27日	学部研①	●個々の児童生徒の国語科の学習状況と課題の整理 ➢ 指導内容確認表を活用して学習状況を◎、○、△等でチェックする。（各クラス） ➢ ○、△の内容について学習指導要領解説（各教科等編）を読み、確認する。 ➢ 今年度の個々の課題を抽出し、簡潔に記入する。 ➢ 各クラスから報告し合い、加除修正する。 ➢ 個別の指導計画の目標を設定・修正する。		
5 月 8 日	学部研②	●国語科の年間単元・題材等の設定 ➢ 指導内容確認表、学習指導要領を活用して年間単元や題材を設定し、年間指導計画に反映させる。 ➢ 対象単元について大まかな計画を立てる。 ➢ 各グループで報告し合い、加除修正する。		
5月29日	授業づくり研修会	●国語科の授業づくりのポイント ➢ 重点事項の確認 ●☆本（知的障害者用教科書）の教科書活用		
6月21日	学部研③	●各教科等横断的な視点に基づく単元配列表の作成 ➢ 国語科と各教科、各教科等を合わせた指導の関連付け ➢ 単元配列表の作成		
7月25日	学部研④	●単元計画①の検討	●授業を見合う会ＶＴＲ紹介①（重点事項の確認）	授業を見合う会ＶＴＲ紹介①（重点事項の確認）
8月22日	学部研⑤	●学部授業研究会	●単元計画①の検討 ●模擬授業	単元計画①の検討
9月20日	全校授業研究会①		●中学部授業提示	
9月27日	学部研⑥	●授業を見合う会ＶＴＲ紹介①（重点事項の確認）	●授業を見合う会ＶＴＲ紹介②（重点事項の確認）	●学部授業研究会
10 月26日	学部研⑦	●授業を見合う会ＶＴＲ紹介②（重点事項の確認）	●単元計画②の検討	●単元計画②の検討 ●模擬授業（※日程調整）
10月31日	全校授業研究会②			●高等部授業提示
11月15日	学部研⑧	●単元計画②の検討 ●模擬授業（※日程調整）	●学部授業研究会	●授業を見合う会ＶＴＲ紹介②（重点事項の確認）
11月29日	全校授業研究会③	●小学部授業提示		

12月20日	学部研⑨	●研究紀要「せんぼく」の執筆分担 ●学部授業研、全校授業研における単元評価（児童生徒の変容、重点事項の有効性）
1月24日	学部研⑩	●研究紀要「せんぼく」の読み合わせ、加除修正
2月27日	全校研究会②	●各学部の研究、全校研究について ●指導内容確認表及び学習指導要領を活用した次年度への課題整理

5　研究の実際

主に各学部でのグループ協議を通して、次の柱１～柱４について検討・改善を行った。

（１）【柱１】国語科の段階、目標等の設定　※資料１参照

① 学習指導要領の理解に基づく学習状況と課題の整理

学習指導要領（各教科等）の目標や内容が整理された指導内容確認表（熊本大附属）で学習状況を◎、○、△等でチェックし、「学習指導要領解説各教科等編」で理解を深め、児童生徒一人一人の国語科の課題を整理した。

学習状況の達成レベルの例
◎　：完全に達成しており、学習や生活の中で安定して関連する行動が観察される。
○　：ほぼ達成されており、学習や生活の中で概ね関連する行動が観察される。
△　：一部達成している、または支援を要する、環境の調整により行動が観察される。
空欄　：全く達成されていない。

② 児童生徒一人一人の段階、目標、年間単元の設定

最近接の内容（例えば上記の△や○の内容）に焦点化しながら、学習状況に沿って段階、目標、年間単元を設定し、年間指導計画や個別の指導計画に反映させた。

児童生徒の実態に応じて、今できている事柄について題材を変えたり、活動への取り組み方を変化させたりして取り組みの幅を広げることも重視した。

（２）【柱２】教科等横断的な視点に基づく指導計画の作成　※資料２参照

① 国語科及び各教科、各教科等を合わせた指導との関連付け

単元配列表を活用して各教科、各教科等を合わせた指導等を関連付け、国語科で目指す資質・能力（＝個別の指導計画の年間目標）を他の学習や生活場面でも活用する場面を設定し、年間指導計画に反映させた。

② 国語科の単元計画の作成

次のア～ウに留意して、各学部で対象単元に関わる単元計画を作成した。

ア．今できている事柄を基盤として、これから課題として扱いたい指導内容を焦点化し、児童生徒一人一人の単元目標、段階を設定する。

イ．児童生徒の発達段階に合わせ、繰り返しや発展性、系統性のある単元計画を設定する。

ウ．各教科等を合わせた指導の単元との関連（学んだことの活用場面）を記載する。

（３）【柱３】重点事項に基づく国語の授業づくり・授業実践

次の重点事項「具体的に考える場面の設定と工夫」「めあてとまとめの工夫」に留意し、授業づくり・授業実践を進めた。

① 具体的に考える場面の設定と工夫

知的障害の児童生徒の学習上の特性から、身に付けた事項が断片的であったり、他の学習や生活の場面に生かせなかったりすることがある。そのため、児童生徒の思考・判断・表現を促し、既習の知識や技能を使って課題を解決できるように、児童生徒の実態等に応じて実際的・具体的な活動や言語活動を通して、「気付く、思考する、選択する、発表する」など、具体的に考える場面を設定する。

次の観点を重視して具体的に考える場面を設定する。

観点	主な手立て
活動	･児童生徒の興味・関心、経験などを配慮する。 ･適切な難易度と学習量、スモールステップの設定など活動内容を調整する。 ･具体的な生活場面を設定して、動作化・言語化したりするなど、言語活動を工夫する。
環境	･ＩＣＴや教材・教具の活用など、適切な学習環境を設定する。
言葉	･児童生徒の発達段階に合わせた言葉を活用し、児童生徒の気付きや思考を促す発問や説明などの働き掛けをする。 ･めあてに即した言動が見られた場合には即時評価（称賛）する。

② めあてとまとめの工夫

ア. めあての工夫

めあては、単元計画や本時のねらいに基づいて考えられた、児童生徒の側に立った具体的な目標である。次のことに留意する。

(ア)何ができるようになればいいのか、何が分かればいいのか、児童生徒が分かりやすい言葉で具体的に表現する。

(イ)指導目標の達成に迫る、焦点化した内容にする。

イ. まとめの工夫

本時の授業で「何を学んだか」明確にし、次時の学びにつなげることができるよう、まとめや振り返りを設定する。まとめと振り返りの捉えについては次のとおりである。

(ア) まとめ…基本的にめあてに正対させた、本時のポイントとなる内容を提示し、学習内容の定着につなげる。

(イ) 振り返り…学びの成果を実感したり、曖昧な点を明確にしたりできるように、自己評価、他者評価を行う。

（４）【柱４】各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用

各教科等を合わせた指導等において、柱３の国語の単元で学んだことを活用することで、般化を促したり、達成感を生み出したりするなど、学びを広げる姿の育成を目指した。また、学部授業研究会、全校授業研究会対象の授業の対象児童生徒１、２名を抽出し、各教科等を合わせた指導等の単元における「学んだことの活用」の成果と課題・改善案を整理した。

6　授業評価

（1） 全校授業研究会及び学部授業研究会の実施

各学部グループで国語科を提示授業とした、学部授業研究会、全校授業研究会を1回ずつ（計6回）行った。全校授業研究会では、指導助言者から授業改善につながる助言を受けた。

表2　全校授業研究会　一覧

実施日	学部	学年･単元名		指導助言者
9月20日	中学部	2･3年	思い出作文を作ろう2 ～助詞や句読点の使い方～	特別支援教育課 指導チーム 指導主事　本多　由香　氏
10月31日	高等部	3年	相手の話を聞き取ろう③ ～せんぼくいきいき2デイズの成功に向けて～	大曲支援学校せんぼく校 副校長　清水　潤
11月29日	小学部	3･5年	ともだちにつたえよう ～ホットケーキのつくりかた～	大曲支援学校 教諭(兼)教育専門監　大川 康博　氏

（2） 授業を見合う会の実施（一人一授業の実践）　※資料3，4参照

一人一授業の提示となるように、次のように授業者と参観者が授業提示及び参観を行った。

① 授業者

ア．（1）の授業者以外の授業者が7月～12月に授業を提示（計8名が1回ずつ授業提示）する。

イ．授業者は、「単元の個人目標」、「本時の目標」と「重点事項（具体的に考える場面設定と工夫、めあてとまとめの工夫）」について事前に「授業を見合う会の記録」に簡潔に記述し、授業を提示する。

ウ．学部研究会で授業 VTR を紹介したり、参観者から記述の成果、課題（改善案）をもらったりして授業評価をまとめる。

エ．上記ウ．以外の授業について、授業者、研究部員、副校長でミニ協議を行う。

② 参観者

重点事項の有効性について評価し、簡潔に「授業を見合う会の記録」に記述した。

（3） ＩＣＴ指定授業の実施

全校授業研究会、学部授業研究会、授業を見合う会の提示授業の中から各学部で2回をＩＣＴ指定授業として実践した。

（4） 単元の評価　※学部研究を参照

学部研究会で国語科の提示授業の単元における、目指す姿の変容及び授業づくりの重点事項（具体的に考える場面の設定と工夫、めあてとまとめの工夫）の有効性について評価した。

（5） 全校研究アンケートの実施　※　資料5参照

次の研究の柱1～4に関わる研究実践について評価した。

柱1	国語科の段階、目標等の設定
柱2	教科等横断的な視点に基づく指導計画の作成
柱3	重点事項（「具体的に考える場面設定と工夫」「めあてとまとめの工夫」）に基づく、国語の授業づくり・授業実践

柱４　「各教科等を合わせた指導」等における学んだことの活用

柱１～３については「ほぼできた」「十分にできた」とする回答が 70%以上であったが、柱４については 38%であった。

７　全校研究における成果と課題

（１）成果

① 適切な年間目標の設定

前掲の全校研究アンケートでは、目標設定や年間単元の工夫について「十分できた」「ほぼできた」とする回答が 71%であった。学習指導要領や指導内容確認表を基に児童生徒一人一人の国語科の年間目標を考え、グループ協議を通して複数の目で検討したことで、年間目標を改善したり職員間で共有したりすることができた。また、２月には指導内容確認表を活用して各項目の達成度について再評価を行い、次年度に向けて課題を整理した。

より適切な実態把握に基づく目標を設定するために、研究グループ内で年度途中の形成的評価を行い、目標を評価したり見直したりすることも必要と考える。

② 単元計画の工夫

対象単元のゴールとして他の学習場面での発表を設定したり、ＩＣＴを活用して体験を言語化したりするなど、単元計画に「具体的に考える場面の設定と工夫」がなされていた。また、単元目標も焦点化され、繰り返し取り組んだり系統性をもたせたりして目標達成につなげられるよう配慮されていた。その結果、児童生徒がめあてに向かって主体的に取り組む場面が多く見られた。

（２）課題

① 指導内容の定着を図る工夫

「学習理解に時間がかかる」「学習で得た知識や技能が断片的になりやすい」知的障害の特性をもつ児童生徒一人一人の国語科の指導内容の定着を図るためには、日常の継続的な指導が不可欠である。そのために次の二点が必要と考える。

一点目は適切な言語環境づくりである。例えば、助詞を入れた指示・説明等の丁寧な言葉遣い、二・三語文での提示等の児童生徒の段階に合わせた正確で丁寧な板書など、教師自身が適切な言語環境となることである。また、個々の実態に応じた聞く力・話す力の向上を意図した学習規律の確立、言語活動を反映した作品掲示や発表､定着を促す家庭学習（日記、学級日誌、漢字の学習等）の取組など、学習習慣づくりの中で児童生徒の言語環境を整えることも大切である。

二点目は、学びを広げる姿を育む仕組みづくりである。単元配列表を活用して国語科と他の学習場面との関連付けを図ったが、研究アンケートでは「各教科等を合わせた指導等において学びを広げる姿を育むことが不十分だった」とする回答が 43%となり、「ほぼできた」「十分できた」とする回答 38%を上回った。国語科の年間目標の焦点化・具体化と共通理解、国語科の指導内容と他の学習での活用場面を関連付けるツールの活用等、仕組みづくりが必要と考える。

８　参考文献

（１）「特別支援学校学習指導要領解説　総則編(小学部、中学部)」、2018、文部科学省
（２）「特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編(小学部、中学部)」、2018、文部科学省
（３）「特別支援学校新学習指導要領ポイント総整理・特別支援教育」、2018、全日本特別支援教育研究連盟
（４）「指導内容確認表」（熊本大学教育学部附属特別支援学校　教材掘りおこしプロジェクト）、2019、熊本大学教育学部附属特別支援学校
（５）「『各教科等を合わせた指導』と教科の考え方: 知的障害教育現場での疑問や懸念にこたえる」、2022、名古屋恒彦、教育出版
（６）「知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング」、2017、武富博文、松見和樹、東洋館出版社
（７）「各教科等を合わせた指導と教科別の指導、自立活動などとの関連について」2019、伊藤甲之助、鎌倉女子大学研究紀要第 26 巻
（８）「知的障害のある子どものための国語、算数・数学：『ラーニングマップ』から学びを創り出そう」、2020、山元薫・笹原雄介、ジアース教育新社
（９）「知的障害のある子どものための国語、算数・数学：『ラーニングマップ』から学びを創り出そう Part2　授業づくり＆教材開発編」、2023、山元薫・笹原雄介、ジアース教育新社
（１０）「障害の重い子どもの目標設定ガイド 第 2 版:授業における「S スケール」の活用」、2021、徳永豊、慶應義塾大学出版会